太政官文庫

類	號	函	架	冊
和書門	特別 三一九五五	芽十番		一〇

内閣文庫

番號	和	31955
冊數	10	(5)
函號	特10	5

共十

篝火

竪並　源氏年卅六

せこゝ夜をとこたえし式心地し給

枕詞乳ものゝ字ある

此ことゝれと

五六日

いはつむいゝとよむ

りうごとしにゆひかし

風のをあつかなかりに

日本政府図書

内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan

かゝり火の影水の上にて身をこかし火を思ひ
消してきえしくゆるてふや
うちわ
かゝり火にうつ入くらりける哉
夜の月なき比
螢もいまさらはなちたるこそ大かたの心なり
こと箏也
月来る比空に
うるさく火焼せは風そよきゆれに身を
烟とかしはとよあり

まことに山家の秋の風
かなしみや
ちらはまてく三人
此中に弁少将もなかりし
風の音猶よかりね
秋風楽の心也
平調也 次調盤渉にて
此琴にあはいて
和琴也
弁少将の月ましらうそく
頭中将の手まさる一面に生月の如かなるか出

あはれとや

よく出まし　教ゆる義出家のゆへにあはれ

おり給へ

さらぬや

御琴は中将よゆつると給

柏木の中将かなや

恋いかなる義のはかなそれたる

玉のゆくれ事とりやをとこはの君ありに

かくり出まし　かとてしなくされん婿君も

哀とも夢の給とや

姫君をけふ哀とこそのみ

ゆる給へ給ひしをなれゆゑれへなまし

し事なれなや

さゆるくとて被して

以中おもいまうさはんや

野分

竪並　源氏卅六歳

色草

いろくれ草や

くろ木あか木

はかりしれ木を黒木といふ皮をけつりを

赤木といへり　唐の木なとありてそ

八月

なし

世に例の年よりも
此ほど暴風吹つゞきしなど書ては心なき
はつかし紅葉の事過し事などよし
春は雨のふりつゞけりいかめしくさやうなれ
ふくて心などよろしきにも梅の匂ふ中宮
ありゝゑしかとはつまりしこといはさなきも
よき事ありかりて不都合なる事をも
思ひてうく書ぬしくはかなし 世の中に
ありて此梅もよろけ真ならざる心ってにても
しろふる傳なき

人ゆれいと深からやうなれ
夕霞の心の事也
おちこちして
ゆふひの気色をかしきるをとゝとはさおもう
ちゞ菊やしそ
おこりはひ侍りて
世の中は風気発合と深也
世の人
さをさんるでしこれし
梅は深かひふの梅子を梅まさらでありて七ヶき

母とよめり
とし風ハあきらに
諸本同 しらんのもの事也
しらに 或本 紫蘭 葉 しらすに 或本 作蕙
蕙二万可移之く
つま嘆い
あらにてハゆつまひの事也
しれるきさんと
夕霧の身ニ而れおもしに思おもし移しま
きらへとたてうききとも

しほけふくとなり
成也
宮すん所と本ニハ
源氏秋好中宮のうすとれ移之
みそれしらま入まふ
中宮のうち方れ事也
ふん毎り
宮のまし 一説
おもさひ成おほし
たけまてるをえりしけしてきへ移し之乳の

公也

いせごゝし

褒ころ切之

おかうしは萩の葉たくは

は其ことしは膳なりける秋合の事をいひ

かけし大くるのをいひ伸して野に

かとれ事をあつれ公事なし

さうとをこ御かうて

むかしれ公と御かうてを行ふ人きれ也て

戯を行し也

いうけん海かうちて

源氏行と云てきし北海なかつて玉

賢の方より出るふと夕暮ころ行也

云て露にあひのましては

源氏よなら貴なはとや

なよ竹をこゝ行へし

なりくまりておれぬ公也

おうひけ給て

綿をうけてむしまるとひろ地之

御前(せ)の津かせんさい

ひめ君のかたに来り給へり

夕霧の大姫君の北の方へ来給

まうけ給ふに

ひめ君紫上の方に渡りましゝ

北の方◯乃おもとにも給へくミつ母より

てかみ一まき御硯のふたにとて給はりて

まれにいまそかれなるこそいつしかと給へと

小乃おとゝの給はんと思ひけるをこそあなかち

心ちして参給

雲井居の人をかへすひるはひやかにとさま

むとゝ　ミく夢すこしもあはれなるこゝち

とて明石ひめ君の雁をさ并てかうしを

かく思ひて御硯まてうきものつれ小のお

とゝにくゝ男くんの事を急ゆまりなるの

又うこれくゝと御つふそのかたへまゐらん

するおかつなし　みえ夕霧紙硯をとらせ

し給て見ふなるやうに思ひしつとも御乃上

少将乃そしのかうしもあるみれ中り東心みて

をおとゝいまたはにおしく思ひくゝして か

さのかや

まくらは記て
　夕霧の言よろしう候とこそ　故ある儒
業を学てその文学のことなく候なるべき
覚へし
こゝ那れ少ね
　物語を好みて
作られ名もおもひろさりきりや
　夕霧の早下知
いはゝの歌への
いはゝのいろある知其仕へ貴妻をたしと思く

かれまみや　文読る
か庭しの人くみも
　女房ともも夕霧を詞をとりけて尽しや
みもとい語て
一通ハ雲井雁の方へ一通ハ西の郎たりと人なん
面し又いはゝみくも
ふて殺行とて
　明石姫君の紫上方より内の御方へ度
　書給へ
うて文

黒のうら青き之

さしぬきつき

紫上もひめ君もいはまをも夕霧乃明石

君行つ表をさとりあれと源氏乃公をき

行くこゝを申せ給ハおほするをいふり

むらさきといふ名ありして

おとこのむらさきといひてとく之

きこし給とや

書紀いはまれ来ていもろく人にゆ法事

下紫式部か自作なるねらしをとうきう

む深しく

こさうしれのみちり

同云抄ハ書に夕霧乃中将ハ紫上をとみ

多はなる所にこゝよりもしとハ女御所乃かは

まや一巻常に山崩（扇）なとを宇て偉に

をるはあ之上をとくさ海にさはまりて

れそく事をとするも枕ハ上乃字如し

私 清少納言枕草子上 端之

ましりちくありてまくら紫かさ河井

かとのおとゝもちそうし御覧しけれはさらに
のさま入らせたまひにきしなれとりけれは
みてゆきちかひ給てありくるしかりし
けれ

行幸

翌並　源氏卅六歳十二月より翌年二
月卅七まて
よくおほしいたらぬ事なく
玉かつらを源氏のおほしけれは心を
此音なれ議なり
川辺の前にはましをなけつり　左近衛
されおりひく海なくけるけれは
門の外とれまつりくるとありて又
源氏の意通とかへりてけるなるらん

ともとこゑし良しとも
とはかより
西朱雀や
はと父のうつれきね
我佛の側ゑ
うきれたよふひ
白ぶ布のうりきねよはなくとり多道
さしめきれうつすむうえ紀むしはてか
とゑ道や
いつてうえ女のほくろひ多てらう

紫志乃大和册余 うしめくとゑ 半年の俳諧よ六 似うきんとゑ
けさうし多法うかちとひくて多てとつ東ふ
まう明しとや
れゆうそくとゑち御し
さちをひく
當世の貴をうきれし
梅のさこ旅とて延喜帝 歌より幸ありの本
かけ事や
本故大氏
うちきうし

くらはるこそみかりするこそ行幸に
雪ちうつもり 此子もさん ほんハ公こ
とい西山し
まくなりしれおほし
玉かつらを源氏の御子のかまへし内侍の
かうにすいりを人ハ中宮の心信みし
とも
よるけく
めとらなるこそ
このはらしゆいまハ

同男女さへ隔しぬ事母や玉かつらのこし
ゆゑハ内府とゝも明石姫君の后娟好
家とよろしかるへし 又裳着ハ年齢不定よ
や 答云 裳着 裳着ハ三歳之其以
後ハ不定也 一勘
宮もうせ給ひて
玉かつらのうへも 三月乃服なるへし
けしうハ
おほしくし給ハ
とつらくあるも

ねう事
物くさ事なし
おほやけ事のさけなりや
開白也
まこりの事は給とりえむ一事
雲井底なり
うつは物のねこらうのえけ
古記の内侍のさけ二人をさらぬ人も内侍
のことをのそむ人あること也
家のいとなみを色にうつしぬ人なん

殿ハらくて内侍ら　御局のいふなみを
なにたてゝ文使人の方を思ぬ人は内
侍番なる任して義なや家らくて
文仕の事をなすはいまん人なる人
もち定てゆとも也
宮使人あ内の人武者らまて
上も下を身つ鈍もくて行つも文使人く
うりハ思ひ行つ事も行り内侍番など
役行する者らうくしうしにまつ
ともきるてあん事ともはのよ

かとろみさしを
されと位たかき人の子りうは事なりとや
ひとしけらけゆへてなすもめるにや
うき所りて可能れ但可思往那大字の
但也源氏の情態御名を玉の神をあるて
と年ころの中へ及てうつりてまつ言文の方
をさしをおて源氏れくうち人来りけの
事よりやむめると當座の所合るよ大宮の
外部へりえい源を父と申ちん人名る
と云義歟

伸うち老て代
備後也
人の代々ととひるひ来られまて
人丸は言之
さしを何んと屋とをしハ當く
あひ宗やを伸しとやさしハつて日の人民
乃公おやうて事りとや
何ゆまい
宗祇也
大臣といえんよ

花

志とけなき大君ありて
ひかりて御さまに似へ
内大臣乃ひかりことくし末も源氏の川
ゆくりひのかすをへちかくしひてを見えん
とや又云光る御かり似つる事にて侍り
紀ん容儀なとも無双といや源氏の内府
又見合せる心之又御かり似つるもて合を
をりて内府のふすかも可抱てく
前大納言 春宮大夫
内大臣乃才速之

かくし　うん命とや
手んさく
源氏夕霧し雲井の雁との事をほのめか
うのかく
大小(タイセウ)乃事
一かしよりわうしと
用意なくしとらし紀しく一小しおかし
とも紀しや
又いかほ似けゆへり

関白を源氏の門下にゆづり給ひしに
又何事ならんとへしらずや
さるあて公承りし
或はしを源氏の為にハ主給ひしと門
下氏の此給

十六日
おやと申しおりし
其譬の公源氏をとらへくちを給ありし
父よりおんとゆるし申給ふ殊さし
ととふさし

むへかりきりと
源氏むろつよ為ろつ重給ひしとし久喜
の中給そ給母乃しを斬りしと今
事あらしを申て思合るや
いくれよろけいは細ひてつひちを
むろ流しいハ三条殿の御事とへ源氏の子の
父母てをとるれの公をとりて方小とや
此一字の中よくとゆしへ此く折くらて河る
のろつ貴るりと
堅固みてつらとよや
国立公文書館
National Archives of Japan

世の人よ其の法をしりてしるへし用ゆへし　いはく
もはならへし見えもし
うゝの角秘抄
おとぬひれ候そおゐ
脈衣あはせて用ゆる脊例　一勘
あ純も脈前あつく採と差出ゆる白綿
くうくあはひの盛脈之
菓乃芯つきり三ゆの何まちの小くちなり
紫の芯つくしなる之　或ハ菠薐草の汁
也　或紙下地を菠紫よ添て上をぬりそ

地の色ハ薄色也こし　河海一巻
紫乃おもくあつりとしや　昔の人乃かなてくくしるきを
ぬり乃せれるの海
菠薐草の搾よや　一勘合点　一巻
何くせの搾あらしあると云摺て下川
勘音抄そ分くしけの色をと来摘の右
かそて芽り也
さ猪いと何やしけまと人にと紡つせよ也
おひつかなり
おもしろくハおもしろしとこそ

双帋の詞也

おぼしきの事

末摘花の衣を常に讃する也

返事を又ふたつむくらといへり

御して今宵力なくて筆をとりはべりんといと

おかしかり

はまつもしるも也　御消息のなきよし事もなく

おはなし

およびゆくりなし

はかなき事なり也

こよひをいかにしてさかの事なりけり御しつ猶え

ならんとしける

源氏詞

御よみにしなせ御供つきうる御わしまさかん

源氏の会にまかる事もとぞうしけるかしと

内府氏猶也

たぼしら猶

方よ御まれなよといつはにまかせてり

いとまりなき人からとけ事し

内大臣の御ありをとひまして猶おねと

まつもなしとかこち給や
人これもて心うし事を
玉鬘乃をとゝいれ君達としていとひつゝま
し事をとうくを思ひ人をとゝいと乞て
嬉しくも心うや
多ゝ御身そ眺しま
内大臣読
内侍のうへ何ゝはあまりしまう
近江君れをとゝいの中ん（中納言）多ら我それ猪を
なそまあと何さもり給

少将あまて治まてを多くひなぎ家
以前ハかわ近江君をとうくさせうる
うつ紀岩（かん）なとも
天照大神を兄弟の中よりくり御公
志うあてしこそ何ゝ出れこく思ひれにて
うすを何ゝめとや
多ゝ御（シン）前乃
中将を言れ岩戸
うらみ岩戸れ何よ乞せて岩戸の事をとい
面りさしことり給りへよりうゝしとや

おとゝいとけさやうに
おとゝいつる声へよろしつゝれ
也孫まては義なる
おとゝ義なる也
ひゝき
秘らや　孫へつるよそと云也
うつおふれうちよ
みとの事也
けいはし云
下人乃中将るまてと云とつへていくんとも

世人おもちかてし
内大臣乃近江君れよろしりぬかちと也
ちりして手ゝ行つひのまへと世乃人
き也くいふとも
御画
同母へ乃事也と云　画の字濁てよむ也
一勘答　画ハ点と可読也
一万七
橡ノ衣人着事　毎妙曰師従欲服不今橡
解濯衣之性殊欲服此嘗可聞

蘭

源氏年卅七才八月九月の事也

我身ハくるしき秘蔵

の中なとにておもひあらし事之

思ひしらめし給ふ

源氏も内大臣も疑ふ心ろあらしと故

とひへともいまさら疑をなしとや

うけて

呪咀の心や宮仕てハそれまてハなしよる

引しりぬ心之源氏の密通をとかけく

かへし

さりとて手はかなき海を
源氏のよはひは深きゆへし貴中にてはかな
しとも

思ひ見れ御
三条太宮の御やしなひと葉末に見えたり
給まにまうての紅梅の帳をも思ひ給ふなり
ふせ給ひぬと見えたり西東の方まて旧も
四月よりせ給ひとなる
三月廿ヶ日のうしくまみえたり
三月如へし

宰相中将

夕霧宰相と言にして見えたり二条を
引幸を葉末の間にて任し給ふ公
なるへし

古風ゆなり
是河流
世にかれおそなり
まうてと夕霧に給ひける
是雨のかかうひとをまて
源氏とまかせとのする

十三日に

さしもはやしうとて久れまぬ
夕霧乃深き乃山路をとしゆきをき紀ね
事といふかれともさてさうとや
はらりし衣（ユヱて）
色こし桜の袖とねと
たとふとの躑躅の色と思ひよらんとよろ色や
御よふと云符よいかなしやしまふハ一句に
まよふ色事
らにの花
同らんとよむつくれ　一答物乃名の母た

らにとよあとをつ称よいらんといふつくるれ
但書本よまうくるれ
山まとも頃俤んをつよゆへい
脈衣のえんめや奇よ之兄弟乃色よや
春蘭　夏蕙かとよれかんろを蘭兄蕙
弟と申すもこふれをといへり
去るし世の露よ
蘭よりそてハ蕙衣の色ふくりとよ之
かと
廿事

夕はへの
此ころの花を玄旨と夕顔とよく頼ね
まては兄中なるし梅よろけきとい人
つらうとて此花とも云ふにはとこふてうる
へよとや云と貞ゆかりあれて蕉葉とよ
めり守れ花多くこそ花多く面白之
所さ義と三つ純も
玉はしの花よこ御の事は所なるんとの
紹まつりてや
かんの君

門待雪に御招ありは一本よせてくしめてこ
ゆる事れ君なる也
石乃うそ形つ
守れ花は面を指によせて下はさうも
所なんとよふつ宗之あらんといふ花に
夕顔の花之
宮なとのまへし
筆は好みよてうまへし给之
おふくよこそ
玉かつの花ものはいまはぬへてと志ぬくま

を思ひ給ふるにつけてハ見まほしう給ふなる
へし
さても人々の後ハ
むかしの人の内まいりなとはし給てかれ
おひ給へる人とはきこし給はゆるしさはえ
夢の源氏に申給也
まさしう給はられ
内さとなりぬ家の人なるに常ゝ家給
と申さん給て源氏の御兄弟の中まで
恨や思給はんと也

かしや
非義なりとみ給ふ
御心さしをひかさ後に
源氏のむかしの御事なとひのうへをけさせし
給ふやうに人乃中とも夢の中給之
おとゝを門大臣
大形無也
かふさらに
此時の御ゆるしさ前之　三従の義なりし源
氏も忠義なれとも夢のうちひ給

一まれとも実父あり養父の名に任
せ侍らは汝か身をひかへしとみなす之
いふかれといふ詞也之
うらにを唐んことなるこれかまきとしてころ
を見て
同にをといふ源氏乃六条院の内にあり之
おとひ人みちおほき事や或本うち
しふとをも同名也
おほかられ家は人乃むらよて我かろく
せんと

窄籠 禽獣をとこあとらしむる名也之 天下乃
公孫をとしこあらる義也言まて八此義お
けつり 或本ろうせんとも又て義之
いとりしをてかくとに源事なりとよろつこ
申され
真実名悦義よわしくは 或本よろこひ
乃字なし 又是之
偏くしむ
曲名也　非正之
思ひくぬれし

しくれもく
おもうしるも也
十月（かみなつき）
よしなく流
川并河海
うつほのかもしに
兆月桂　庭氏棲事之
宰相として
玉くろの方よるし女　めいとく
あまいの事あれと

めつらしうしれかの義なりと云々
いはくと母氏をそても
以中和伯兄弟のいとけなうしはつりとれ
私と二なる也
いもせ山
兄弟なりと多くの橋をかよふと又
恋母よせ多防くあり之　別義あり
緒断橋同事奥列之かよひけるより
方より詞よりけいもおりよつて
らうおね河の御之

よくよくに
誰をかたらし
参らせけり
何事もよろしからぬさまにて
女房の思ふの心をとりはからせて内中
御よ侍也
かくりんもとて
或ハかくもとて やゝしゆるし
同格勤と書くる也 一勤なる人
をいふ今も力者のくころと常に云事也

大将右中将おなしはけ
鬚黒右大将柏木は右中将也
春宮の女御
妻家の母女御也
たかいえ
嫡女也 九月（ナカツキ）
舟のおりと
女房也 まうてのことにあり
御目さし
天子へ奏聞申す事也 御気まかなひとも

なりて月氣に
葵花の自ら向日も當代そのれとなきを
よ源とよ　むかしの君を我とハいふべき
らつんとや
此
本丹も人考とハ
むかしを女れなれと定めかとよし
禁上ハ又家上之中しくらに及ぶべき事
此公は此極頭に取て小るべし

真木柱
源氏卅七八歳事也　冬より明年秋に
いたる也但十一月の朔日は其の始に黒髭
鬚黒の宮に如何なる見てくる
うち丹きこしめさん
源氏の心之
思ましつゝて
弁乃おりと事し　花
すこし心ろしもちるし　心待さまを人の氣
めし

舞楽乃ことハ小方の御の事をと称し玉
歳紀とハ玉ふるれけりを念せしたま
歌ともせ小の方ハ公ハ御の字志了称され
仰をせて玉ふての公を心清き人とかかり
まへてまうてハ心かくらぬ如し
公さしハ有かて
内大臣玉ふてとを念ハよことも
三月の舞の
りちのまてと儀式いろめしくせくもしや
くち於しうまくせ

志も月廿歌ぬ
非ゐすまくて内侍の御前の方へまかりいか
手て事をといひ合まるようまい必ずしもと内よ
まも仍つくてひ　一揆
りてらうして
和しらう猶かと舞楽よ對して曲もか
しとてかくまて御へし
おとくれたほまうん
歌舞よ公ゑひくやとわかまゐんふうし
手りせ

いかさしひ人の心みたれくせ
源氏の身つらくみたれたるを今さらひと
りの事也
きえし涙さへ
常よりも思ひ身をあかれ給しよ物をてうとく
しられ侍りし也
おもひあらて人みハ子孫ともまよひ川
只川のえ為一様勘云まよひ河ハ三途
川事也　花鳥源氏ニもハこく源氏君
川涙を一涙心さしまよひ也　源氏不通

て人よゆけつゝと思ふくしと也
又はせ川
此奇らくたらあらく読様見志あり心ら那
らし事也しこはせ川ハさし事也まくて
ぬ泪よとハそのうき契ありと又あささ
ふとひやこ川をまよひとらけてよあ
見又定行る死より泪よきこゑてハや
とみ
よ泪みち
三途川なり也

おほしきの事をいはん
人さしの事也
世になきは志れくしさ
それにしくあらし思ひけ給へる
又仏やさてさと
言葉にはとなき事
二条のおとく
玉のほしの文蔡上の文をもと二条と号せ
しるの文字無不寄頗
思ひよきことし公八ろうへ

四へまいらせんの仏也
おんしやう
左海井なと
小方の地乃字に打足て百済きし也
此のきふ乃
都舞足の小方にの絵詞
世の人子を似ね
地のきおる
かけ合り
ほまさうゑにの詞

うみいとうはつかしう
一首かくいとけうらにて
おほかたのとくれさは世まし
なる俗おのなりハいかなる及えんとも
いはされむかしあり乃座にて
殿上の事ハ
人乃れおやけなく
式アハ実をとは
うらしかともにはなら
おろさあハ

多人なくしき
男くし能ハ
中ねりくなと哀れなりや
世ハ小乃方れ人のよせてなくし乃物
えんしとなくし
大なりひとり
神よ川へ向身ハ河しれ
ありなへ
ミさと所との人くらくくらの人なとれ
仏

公任とひといひいひなりし
知の字也
うたまひうれ
引者乃ちら多てなるとひろ事也
写をよに
兆数字読助之
津しやうに
実名也
ひとりめて
前かもも葉稀れ次敬よよせたり

いとゆかし
中務侍従民部大輔
兵衛督乃父弟之同式部丞又息民部大
輔よ任せて帰つるまゝ白緒之 九
一説并抄
音ハめは任官白之 読人
おこまんゆちハ
擬思乃うえもかまひし給へしとこいぬへ
見し奉給也
宮れおんせんし
内ちと人の集給りん此れ事をも母乃ましひ

のつゝや

むかし物語

住吉乃物語にハ姫君を父ハ新んしく

は思ひしかと継母のにくしみかゝりく

をうつほに籠しをりや

伸してゐれやり母て

父子とい万形外りとや

いなかんとも中れて

父ハ今りとも中れしれしてとや

ひつき文

かはき柱乃ゑきにりきそらり

泣きけきと　ひけるかたる人哉

懸をも記によせたるや

ちゝ小乃方

出よりの継母

此中乃うらみ

弥是つれは世をそろりて出家高僧もか

うらし振也　喜外れ人ち又帰よ及ハも

好而氣其ハ悪也之

おとりまても母ほ入毎かし

姉妹弟兄皆列土し
ちゝなる御子よりはなかにてもまさりける
し給ふ時いとおしうしたまへる人の縁
なつかしきをとて
式部卿宮の御方の御心一動しまゐらせ給ひに
八衛男をすてさせ給ふ玉つくりをいとおし
くらぶまじき姫宮を人にとや
ありなり
不幸
あはれしやう

今生
家よりは何ゆる
式部卿宮敦賀を源氏志給ふる
給ひ給ひを寄て
玉のうちの守母て大将の寄給ひし
柳の下かゝ孫
同志くれは恙とともに下龍顔にかた時
節をよしぬるまゝや 一巻下龍顔の文時
花よりは御心 桜梅八十一月より恙用にて
なりし 柳に春なれ 柳と号ひて夏なれ

卯花とはふ同物之
あさぢふのきれさしね衣
同八しの衆乃河しめきこや縁をはせよ
を徹れされさしめさいいろしあら河目
つめにや一勘風流れ（今良一説之）河角の抄書之
母いめし給つてを河ろそ
大将れ小方乃也之
いさめ卩給
小方乃父母れ様之
はみさり所なし

大将の君ろを河ろぬ常まに治定してそ
とも之
むめ君はをもお信え
志本枝乃姫君の事之河孫君ま似たる
と云詞也あるをとえいつきめ之
河こをとてうハ
小方れつきとは之
みのきん母ち
一年こもんさち
く[illegible]母寄りしに

式部卿宮の大将まうしなされしかはへしう
ひ給ひし小よそ事りされともそしの
事也　作者は不知
年のくれに
源氏物八乃巻之
をとう歌
紫宸殿のうしろより仁寿殿をへれうし給
ふ承香殿を内侍まうのひやかに参
内綾綺殿の陣まへてまはり典侍参れりとを
参りて主上をほらんとされさて衣かつけなと

給ふ事を申るとこそ不思内宴に射の
事也　作者は不知　花
男踏歌の事きれて
同し玉くしけの内侍所方まてとまる
はしらうしらの内侍のまうそとを
経る事にや　前の詞に六條院へまいりハ
此院をなきにしとさる紀の事とはり
斟酌　随意勿気　一勘　答男踏歌
折もりし雲客まいりかや乃物
院をこともし　先例を調へ申候

所々にも書たりけり円融院の方ひとも
そのよせあつく非参議にて有行
事なり
女御とは宮の女御おもくしられて
式アツの女御之承香殿のゆかりの
東西の事如し
女御のおはしまさりしや
麗景殿のいとくしとの
中宮弘徽殿乃女御此承香殿乃女御たれ大殿
乃女御
中宮 姉妹 弘徽殿 円大臣女 二の文女御

春宮の女御 見奈留
前ノ承香殿ノウチニスミ給 承和之
式アツ女 たれ大臣殿の女御
三ニ年アリタル下
春宮の女御をいとあはれに思ひてかし
まさ更ハいとふくおはしませとも母女御
時よりひあれめくゐ之麗景殿のゆかりしと
東宮の母儀の女御也
花やかには侍れのかきゐるも
そう業
ハフリ
哉かつりたる也
まへなの八郎君ハむかしひとしくふかく
円大臣の息子にもむかしひとしく当腹とも

南時歌は何のさ之かき乃心よや
入しろをも女房をらをも
何しみも女房　年一用九
かきもかの御何かし
至そ乃方より水狐てきや
心舟のふくね
芹はきし昔の人を歌とく心に物乃
かるへさりきん
大物へはるうのれさりし
東序よや

似つはの辞を
百らとりの言れ心連懐の心也言にあと
何のらりいふり
うれよりとて
無事いる見み(を)大物方よりとて候
うれ大物の志あくなる新を深山本と
よあり
みもあつしまりきりと
深野のことくにてみさうし物のゑ上を
又然之

かのくらへる
源氏の心を
よろこひかとも
むかし伝こ信し給ふ
はくもかれきのと
一乗しかせ以前を知ふはつれはまれく
又今をはしへかとも申させをとしみ
のふ
かとてゝこいはひてつ参し
云こく此ろつましさつれと申上れ御約

也り奇まてをとあそみれ　公ろうり歌
あらひ給一條尓や
源氏よきよ上れあらひ給ひねよてむは
ものかれてあゝしを思ひよそへていゝ
尾や給ふや
いかゝんゐとも
三信事をとあり
うきふつ貴人かしく
人よ此悪をことふをはやとも
むつし貴也れ

世人のくせれむつかしなとや
大将なくてまつりこと世の例と
男はしをかけるき事もいて貴ぬつきし
よりぬ事をいてきぬつきれ公あろう
の公とこるや
昔のなまなしか
平貞文むかしせし我か孫なれ
まれなる我と
北門の公とこるや
御てくろ海ませて

玉簪の門（典）徳退出れ輦之
なる我海より
近来によわり
あさをとて
大将れ公や
かの宮にをと
式部の家之
つき多れてし　いうし君なや
源氏れ事をと思出やとし
いかなりけり事あらんとハ

右近實否をしらすと侍へ
うたるゝ
僻案抄にも擧して　万葉ノ歌をあけて
よみてはむかしの本かたれかしとなんいふしを
年をとらにけるかと　暫時之
鶯のなくて山吹うたるゝと、しこれも
暫時也
あしはなりあかなうり
今まてゝの事を海不當事にて捨かな
しとや

ありまれしてかをとゝめて参て玉藻をかなる
つらん
和琴　五指子ゝいにゆきて参三月のしまへ
こうなかとかかりちらしてまたれかに
時えんみろれむに津ゝをこゝは時之
あらのこれきし末なるまておもれ　私
後漢杜詩傳將師　和睦士卒鳧言
歡悦如鳧戲水藻
あるかわかし
源氏乃心を思ふへし

色に衣を
續古今　思へともいはてし山吹の
花色衣ぬきかへてこそあれ
うほまいけり
夕されハ野へよし　河海両義有
ことなり
かくされたるふりて人の知まじき事ハ
源氏の名をいふ玉はしれ事を織ようき
あらかれありけるハ今そとて
ありつれいとおほゆるを

閑野の事也　こゝかしこをうちとけふ
めかす又うちのこゑへしうつり野の子
をとられ子とこゑかす一動かうりハ父
音通せり声の明れかもれるをとられ
こともかほれ子ともいつき
おもしろし
又り巣よ又かくぬ事をとあり
すられてねにもいぬうられことを
手おほゆるとよあらまことくてりとをりか
くまてこそ河まとよありてすれはる

らにかゝりてあしよみ侍給ふ源氏
の公中をは拵しをりし侍たゝれる
よなりして御しみと源氏乃方へ包みう
せ侍ゐねかとやうまゝあり
ありうぬる氣色に
源氏よりしこ御りうる為之出るめくし
やとへ侍ゑるおや
ほきし給て
志まをとろかすふも
ひめ君をとそ

末摘花の君之
かん乃君のはらから後
大輔乃息兄弟物語しけるを
うら山しう
其末摘花の君乃為之
う乃年れ十一月よいとをかし北ちことゝもん
いて来いて給
源氏所八歳の十一月之五日梅黒れ
男子誕生の又末の紅よ秋の夕のゝ
あと十一月の事先あしかる斗之

をくれとも
内府事
わきとりはぶ給さんならにをれうらかと
をとゝり行くに
玉かはくと内府の女御にをとゝしん
とや
内いり給事そ座そうて座をぬつりきら
内侍のかみはかし給宮中にまうつい給
ぬるそをもまうけし
宰相中将をよろまおろして侍なし

志ほりなる人かれくらく云
何人の義
無奥儀事也
はなうしたかり
らういなききは女御のれうしてたまふ
人にとひうちぬをとゝ
上御人なとゝ
夕霧乃君しや　舟人にも近江君をと云舟や
同主上内侍督のたまに出仕のうし　奥本
柏の木とも集流出しかも哉よめ　又例

あるは　一答いはきの方をとりて奉るなり
閑に記く云口成上人女房なとも供なる
斗きん今の世にもとりて用ゐれは本紙へ
けるかりあるや

梅か枝

源氏卅九

大弐のたてまつれる

太宰大弐任の年之されし浪の香てまつりしは

右は大弐より奉るものにみせは大弐の年

まりとは義もき

いつもひれなや

大弐の年行の

かくとも

沈香事

うろま　承和 仁明天皇 用也
いうて
不傳男子と以制あれる之
うつはひんうしの中れくおちいて
花色もよしし可用之
東乃斜れ中のくおち出と西の千し可給六条院御
方しか蔵乃ゆうそひ也
香壺
これ字母こうりてよむ　一合點

無常の家海り旅可
蛍之
ゆいろ歌
ゆ裳差気事之
前象院
模旅院之
ちうとち歌くら
ゐれりし歌一と
葉をとゆくせてとお旅しつ
あらく

打桜之助を京なとしてとせ
さん前りまハ
是方に緑ある色之松に付るのハ松を定
に徳らの末く里方を定中なと京和雪
またとうされぬ句に角とへきり
うらのほうかつ
女れさくそく
裳うしきあせ
うれ色のうみ
和梅うき称の如くし御まへれこそしまいつ

付さり
水やまとをん
若宮のまうして称しいまそせ
みもなるものハ人のらつ世て
此若中宮なり
中宮御そうせなりて
秋好に岩されうし中の世中さ松んとせ
於へあと
秋好にいそひ人なるにまそへ於やうりあと
以上

いひしらぬ匂ひともれ出てみとられ句作の
一くさをとらいはしめのこゝろをわきまへ難く
詞のはらさめ事一々をあとゞ善悪の
推敲をとの給へとて夜々吉只一推也
冬々吉一稀と見てとり
右近の陣に
仁明例
惟光の宰相のを
惟光宰相に任し御のしさひらしめ
てこそ

竹波者おもとられ御ハ
梅香者　いつまでもしらうをと合符中に流ハ
無上一稀々へて合と稀まれおもとくよそへて
梅花をともくれたりとし
前朱雀院
寛平の御門をと申しられつ給たりしハ
宇多帝をと前ノ朱雀院と申乳　私
百拗
一説さく萬とくいつまでもいふ　稀し

又云一首之白安香 右忠部下 兼平北
人 光孝御孫
おとゝ
駒なれかゝり也
蕣人の乃ことに
一蕣ゆきによるせ侍にほし 六条院
蕣人の之
ゆきのはおもしれ
裳花よろ遊一ときなし
宗さんかり

蕣花の礼也 私此儀之
梅のえのつし無々
花よりて書れるとも思ひして云ふよ
是詞よ付云のと詞母す（又ともとりて花也
此ほか人
無のゆこう無し
柳書よき
子世を合ねへし
秋のおよりて此詞使ふ
なありて風のよく覚ゆし

笛なる遠く落梅曲をと思ひてよめるに
吹と云詞まてよめり
ほころひるゆへし
鳥の羽風よけよ何や
手かれ路八ぬ鳥もきぬ
未焼へ
花乃香をえるふね
鶯のね早下よりふるき神と云義禅
図一傳えるね鳥のねしね之源氏乃とく
連歌製来の仙よりの何とありて傳ふる仙之

くれし鳥は
いとひおそれうと云心をとりひ於
めくれしと古へも
花乃下のすかれて鳥の歸と云文選
とれ中ををてあるれは早下をなすし
鳥くその衣如くし
又なき事と
いまふおそれし事をといふ
あくて西乃おとしひ
然如中宮れ坤の推也

宮乃れらし御とて
秋好のおつしまれ
れらしはけ乃同例
一期と同例ある人れ千役をはしもる之
おほしとりまし地
源氏中宮よ中姉
仏せらる
忠ひとよ下母四子之
そく君れら気形らに
御元上るか　よろしき年よ　嫁ぬるを

朱雀院れ御子
春宮乃ㇵ元服ハ
明石中宮よ一宮れㇵ御ちら元可勘
みをはつし乃書よ可見　おとこの　イ本
おの子れ
左大臣乃三れ君まいり姫
梅乃枝乃お前し　系圖
真木柱よた大臣女御し　同れ別れ　私別之
是ハ書文一条院に以前れハ冷泉つ之
きやうさくれ
源あさ詞

おのづからハ
明石中宮の御あそ
きハことゞも
あらひなれバ
よろづの事
世上に源氏かたり給詞
家の御子た
嫉妬なり
争ハをしき事ハとよりてなさかさいふ
人くさけまと

外よりや一禅日記まよありてくどこく
下越前の詞よ今の世へきらかく哉ならら
ととき但文まの詞よ今にハ昔の事れと
高せず
よる紀事
侍よ貴御よ白ひゆりよつき御よ白なれバ
事なき　禅日記
そらし給そ
慢し給うとや
御ん家の思ふみなら

よむハ草に実なきぬを云例
かんなれ
いよし草よめすと云
無ア口文
當左思錯　不入系圖
ゆしのひも
式ア口文れ無清錯
客の息之先帝式ア口
まいれたん支
董会称し而なれく例と云り

よくれてしも
不要之　源氏のかれ無之ちなしぬるすへ
三くヽり
云ゝと云義之　但きし叔恩の詞文字よくか
かりて見
れこゝろもとゝもに
而よりの草子の義て集しせられ之
おとしゝゝ
云なとも
墨風善射之

はかうき
　りとりえし手なとゝ之
古万葉集
　同しいわし人の万葉と云義也　一巻今亡
歌人の
　略しの文し
この歌のえ　なし　上中下(かみなかしも)
此御えこ
　明石中宮のにはれくこ
はしの歌の

絵合よし歌はりしの二書くらり取出して
その余をもおしなうをいつり
は人の
　夕霧
一ろは津とをとを
　人のこうをもえ思定かくれ
歌をうれしくき
　川分
右のおとし中務の宮
　先祖不見

かやうの事ハ
源氏の父御門乃心をもしへるといをとつゝつ
ならぬ事なりとや
うしこきこゆるをもしへ
同父帝御詞也　源氏ヲこ海やうにゆるし
在ましし事や
位乃あさき
位ハ浅き者ハ進退自由にて叶しき
事なとや
くさつひなる者人

一人母思ひいう海の事をなき義也
昔をみて侍る
右大臣時平公事　花　又世継　[illegible]
なり　河
としハおとやの心よ
女乃おもやれ心也
身乃海なとそこ
川音よく叶つり　哀なる雲井の名也
心也
世なれなる人なり

夕霧のみおやとても雲井の雁ハひとつにて
ら身のこなしや
思ひて仍る事もとより
内のおとゝ雲井の人になし
はゝかさこし
雲井雁のより
忘れぬ人や
夕霧男つらしのより
きし忘るゝを
夕霧のおとゝひらはゆるより内大臣の
めしなしを夕霧の身にうつせなくね
と恨てしるを
うらとて内はゆるさゝを
夕霧を世の人のあしひよやと云也
見なつりとて
終句
放生事　私
應徳三年十二月十六日御歸位
叙位執筆　通俊卿記云

東對代南四間為放出母屋并廂
東西行横懸翠簾則西障子
立四尺屏風南北行對座敷之
簾湯(端入)帖(大紋座絶席 五尺許西方)(敷之) 為云
繝座擲切御簾前南面敷円座一
枚為揖政座其前六尺許敷円座
一枚為執筆人(小面)

同日時範記
御直廬(代東對) 放出四ケ間(十三日放出三間而今夜)
(假座席撤所加入一間也) 西面御簾子卜御格列立

四尺御屏風五帖小御簾前(去五六寸許)
少寄在敷菅円座一枚為當御座
南去六尺許敷同円座為執筆円
座

藤裏葉

源氏年卅九春より冬まて

かの宮世を

たれかとく中務宮の夕霧にまし給へ

みし事をと云

しらくれ車とやまり

夕霧雲井雁に密通せしす

三月廿日

大宮乃御忌月　紫重に四月と見へしより

言ふハ三月といへり昔ハ八月の除服を
日ゆゑて行ひしなれバそのひをいふ也　五ケ
月の服を七月までとあるハ
上岡書ニ大宮ハ御忌日三月之前まて卯月と部
とらハ謂之除服延引之
愚今案服ハ何ケ月といふとも其
日数をとるべし假令三月廿日の己忌日なり
し月とやらん服百廿日をとるべし八月の
廿日ハ百廿日にあたるべし　當時も百
用ゐられたる日数ハ後を轉服なく
也全服をとりの己忌月しらハ已忌日也

猶とも猶服中ハ用ゐる令の文なり也
今此蘭書て八月十三日ハ除服を百日
十の事をとこし如何にて除服せ
ぬるべし　凡又目次をなるとにはきて此
義令をもいふ事なき除服延引の義を
あるなるおねがふの仍て
假寧令服記条く　服年謂以十二月為限　不行同月其ハ五月以下ハ
並皆計日ツ
かくし猶つ所　ホ
年ハの御法の元をとも

大宮乃公に入給し事なれはなり
公方ハ角くし哉
人々つゝり切て蕣おりしに雨ふれは御の公を
ふれなる詞也
よくこそ見に
せし昔也
律ハ角ら比
七日之　花別にさかれ〳〵と
一日乃花の法
源氏　極楽院にてよれし事

よゝ宿れ
中〳〵にわりや海とらん
宗井房父乃方より夕霧をと振舞ける
定ゆりさうハわり御ふましきに中く
公とも我か北なるし折りやまと〳〵んとや
黄民目ある門に之我にえんなる　又一勘云
夕霧れ西方なにいさくの思案しるゝなる
む鐘情ある宿之
すいさん
男にさくらふ人をいふ事也

おとゞの御まへには
源氏の宰相
さめしおもみ給ひし給ふてそれハおもひし方
のけしきなりし
孝あるまじや
まさとはゝしされけり
兆条殿の院と
二位三位なとの中ねし　宰相友二
藍と見ゆ
かしはくに

源なる詞
お給へ多く
源氏を以て
たとへまうし
世の人皆源氏よりはしめてかくとりつに
まてとや此今内大臣夕霧をおもひなん
世のなりし
春の色
内大臣詞
ゆへに

紫をと女よみれ
かんせんかもられいといふ事
内大臣をとらやまふ一首之中位よりて
人ならいはしとや　かまいとをよむなや
丈籍も家といふことかんとさしとよむ也
よみやう一定せさるすなし　一動
吞みをんしやくけらいとを一讀也
あふられをしへとも
儒者也をしつとと云　花　内大臣いつをし
東乃ゑし

いつての昔をと思ひ（思ふ）をんらうりにとと
夕霧乃胡月をと捨てをは仕去ちよまう
かへしと思ふとやらうりとを大事故
は仕持はかるす
此ご義よく
時宜よききこと
梅乃うゑ也と
内大臣詞
思ふよかへらんかなん
松よりはなことて書よきゑしと給り

よせたりかへとこそ所ゟ思ふといひあまれれ
数ならぬ身にはかへとゞめ給へしとも
見るとやあの
雲井の雁に思はるゝ
ほしの前をとふ身よ
夕霧の方より女の事をおやにかくさん
ために籠りて下向しそれを内府の
けやきくしとれの事
らし愛ふけつこれ家の
こころけつを書侍し　花山抄紀古今

をりてゆゝ語てこけの事多く
これも此りつてこゝろをへしところきゝ
ハ家の源まてなり
あやけり
此字なしふなき事かと
中将ハ雲井にちかよ
以中将之　夕霧のことよりきこえさらし
事をと思ハ
おし哉れおりむ哉のハ耳とも額つやゝこき
あしけれ

いふさハいつくしきえめしかなとくしみ
なるをハ云ふにおもひやしと云納なましく
西屋れより今に夕霧の我任大臣や
なしうりの逢てまうるひさりそれと
夕霧の名よいうひらや思ていたきめしう
かとれなり

河口乃とこそきしいへまかしうるをはも
夕霧の名さやしよるわしてやうな屋の
うすらくおやたとしにハやさん海をもし
かとをはおるよハ親のうちり海もそなハ

せしまねといえ海かしうりるとも
なさ義名をと
雲井居れ云浅黄ゟとへ云ら井居れ
おやの男をと夕霧のあさくいひなしな
ひし事もいうくをしくとへ夕霧の
綱よいひをもし成るを関ね海なるかも
それよりりて出る事をよろつてよあり
いうに浅くとる出て我子をと夕霧
の若し（人に停学）となまには海りる人をいうそりう
しきんとおほめくせ

くはされせ給へと
よくある同し　かきたの弁ハ奥州かき
あれ関ハちくく海りの所也られ宮かとり
出る事をおろ習之　そのことハゆるれハ
外みを行さくいひきしこ海よハおるし
とこる人多う云之　文書るよおり行しハ
きれ云乃訟をとかとして都し行つり
やさしくとして西向ふよ義之　説者云廿
将う為ひし公ハ夕顔乃女の歌よよひ
かしうし紙とり行ろせてうらひしを

夕顔乃関れおしう義とれ給ひし紙
女君の行さ義名をとさししもうとう
見て又よみ給也夕顔又うることと海所も
かうふ程おり行さ紙くう1ゝれ給し給
かと答のる之
詠くされの
夕暮れをうる
中くもふた
雲井房をけさハろうしくたのむと
まーつて

ゆきせられける
女の心もとけぬらん
みき見あへき
八雲御返してまかつ給へ
右近のうし
夕霧の左中将也　左近将監てう一貫九
たまても　見今案右を下野
ゆるされおいつくに
内大臣の事を源氏の孫
おもしろし

女くしきを也
おもしろう見え侍れる御し
源氏所九女　うとて花田
宰相能也
夕霧十九女　紫女まこうし
ちかうし拝あ
承るまるむり　一動
去る舞ゆやの
花ちてのあやれ
まうへいうし

親王大臣以下布施を内裏にかくるゝ
行也
わきとるしねと
夕霧は心をとかきし人なとも
女御の御まさき後
女御の御れいさいくひたとよろしつゝ行つりよ
てなり
小乃方
女御の母内大臣の北の方
所をられ小のかゝ

雲井雁の母
あいのうへ（ろうて六条院の）うつまひまうして給
御生御形　左花ある　別雷社　生御一所
ゝ所まての社館へ出上京給之沼の南よ
見てり
上達アるとゝもれさし社よまいるはとらひ
給へまはさるとは出給ね
けふよあれさし衆より深山の所し社へ出
のみ
近来法まされ使者以中御なり

同賀茂祭の使のやくめの事　一勘
ちうきまて（比へ）を近衛使とて偵つけて息中
おおかさり車みとひ家てあつまりを
見るゝ事なり
うれしきうへ我ひてまいり行まゐてくる夜
みえ多ちくらうらちあわさおとへまつな
へ義をわのしあちはひくゝうしれ多くかみ
うさなり給玉れきれそえくなるゝ妙
をかいふかしうふかうしうふ
輦とへ姫君の車御へし　紫上なと同

車して参内よありし　末の詞よ紫上乃
輦ゆるされ給ふをはいてりくゝ多る
かはとふ明石のよろれ車如へし　花気
君君の如訓（不入）可給の
おほかとし給ふむ御をうらとけめるく
しめなり
紫上とめ上との車にこれとめ事
ひめ君を母の君すめおりにはゝ世てま
これをといつはりとこゝ
御てらの院なとゆるされ給て女御のきさき

海をとしに
是上東門女御とは大とのゝむすめと云也
かれ姉は上天皇によかほしかり
花鳥ー
内大臣になり給て
同云 彼任のおとゞの事也 末の詞よ太
政大臣と云る内府より忠に任をしるす
旬例也 一勘 平清盛公も内府より任
相国せる也
何さかんより内の世也ー

花鳥
三条殿よ渡り給ぬ
右大臣の家つゝ二条の家の南は大宮の
今おもふか也
おの水の公あ御孫まほしきれとおさこれハと
いゑして
手をさしひとを見給てさ公ともあ御へ
きれとも翁あれくタ霧と西ゝ井の
中よて斟酌のわしや
うつゝきれ老本ゐ

前朝よ蘇きことゝいひしてしるきおもき大
宮のまうる井の倉れおとものしき人より
御うら公下よてまれ
外余月乃ひかりはかるのほとに六条院に
り有あり
康保二十月廿三村上乃行幸朱雀院
之例　花
まいむまえれし
此後乃あるわ此馬六条院用ゐる
とはし有れらうひのおさ院れらうひと

同云六条院みくれ事く御厨子一所乃
精絹の林さとに内裏よるときれまや
一勘御厨子所ハ主上れ御膳をゆるさこ
子所也それよよせし御うらひ成
らし
池乃魚をとれれ廿ありう一し　る一はうひを
右れ出けかりまそえんてんれ東まりお御
つき出て
同此作は宮御まはる義え精ハたしるさ
ありうりたる人聖まや　一巻見ハさうこ

まれなる清なし　奏者なる心にても所為
事あり精竭乃勝劣をわかちにくき也
題は御前の池にてこそあらめにて此時ハ
精得賞せらるゝにや　又前後遅速よ
ともかくへ成べし

賀王恩
兼経

紫乃雲は仙洞にさける花
同前寺乃心也　河海に慶雲寿星の
心得て仙境乃事也　一句紫雲と

に河海といへる仁堯乃時の祥瑞
寿星は徳星とも云　聖代明時の
祥瑞也　仙境乃事なるゆへ紫雲と
に菊乃栄によそへたる　又菊は星に似たる
また菊は小さくねむれ星とよめり　又紫雲
をもと禁中乃事になすこと
まいの言つりけむひこいたりれをしめ事を
こそなく
同前寺乃事也　ひといひたる事をしめ事
心得　一句目にいハ天冠かともいへる也

又多く総角乃額とよふ也
あまた貫行の紕太て津りん八（こゝん）
花色に
中納言れ方よりし紙一帖おとしあかねそ
めさ御しの記れ
冷泉と漂とれ御抜へ便よ又夕霧とおなし
風ゟ為れ御ほめさら公まてめさ御しと
いへり　花云　中分末字書

橡事

延長式　第十四　雜染色部　赤白橡　又て

櫨ト茜（トニテアツシ　サス云々）　青白橡ハ苅安ト紫
トニテ染也　行くとさしん云々　只白橡ト云
文ハ別ニ不見　赤文ち色と云も同事
〳〵天子門家所ニ全着　赤色袍　其外
雲ニ　依時着用也　文ホハ号一面見ん
門家着御ノ赤文御袍ハ唐生綾云々
花色御幸　并　裹葉より源上云々
以上一条前関白返上永正元降三ケ又
白橡ハ名稱ニ行織不審ありて赤
文ちそれより行に給ち也ある一云々

白藍なと云しこゝもち侍るを世尊何篇ニ白
侍物なることあるハされ赤文青色通用
し称と思ハ別不見深色凡名称不
及ふ節也　以上下官一条前関白説
也今注入之

若菜上
巻名源氏四十賀を玉かつらの君の祝し
まいらせ給ふよりいふ此巻の始は源氏
卅九の冬より四十の年又暮て四十一歳
の春まて
河海しく
病者御く
きさいの宮のおほし御しのひ程を
朱雀院の御詞此事に悪后の事を仰せ給よ
しかれとも院不孝を思ふ也

春宮

今上の御事也　安時は冷泉院の御

代々

せんていのきんし

薄雲女院式部卿宮なとをとゝいひ也　別

腹之　朱雀院の御代には后立ありてあらし

せ

多の義にて女御を

后の事をと云

御もとれは名のしられは

朱雀院は名のくおくし御しては名に

たおかりし入ありし　朧月夜にをれはけり

けとされ給ひし也

西山なるゝ寺

朱雀院の御山居事　准仁和寺

天暦六年に定恭天皇仁和寺にこも

て給ひしての　御叶つり

くゝ女御を

承香殿之　舞ある(?)のいりしと

ミうしろとゝく

女御更衣の事之
此世に恨おほき事を
源氏乃名詞
故院の御の
以下朱雀院名詞
春宮なとゝいふもし
源氏乃かむらや
此梅花行幸
春秋とゝ云に夜ハ春に属し　冬ハ梅あり
属とて此義也又拾遺部分り新花

春と夏とを属とて此義ゆへ行幸八十月
之鏡を秋とかきりたる詞僕也
大小乃事に
故院のゝゆいこん乃如くとを
源氏に大やけに仕へ奉ることをはゝしつゝ也
廿日よを
夕霧十九也之　源氏卅九歳之
何ゆへに移りて
女三宮おほしめし　よせはの事し為
了見也

後院の
六条院をいふ
もろこし本
禁中の事に御せし
二十からは
愚 或本 なからとかきり
ひめ宮の
女三宮の事
今うとれかうしには
同母ハ中宮

嫉妬事
きやしやく
ほめうこと
中納言
夕霧の事 女房達れ御之
色ん事なるに嫁かし
先上も其意の位には十分なかしと也
前斎院
御かなす
かれくせ

此宮みえと
女三宮にと候き
弁かの形見の事なかりん
此ハ六条院のまへ
まかひいりしとたるを御まゐりてまん杉ゆ
る
弁御之さゆかしくいひて又物語りえ奏と
思あまりしるも面白候し
此かハ此のよれ
源氏のはなし　ほとしいるとれなかみるまし

うけひ義
ほとしまほまて
源氏れ公をいふ
今乃世の庭しにて冬これはしりたいはるへ
りしくて
まつ川よ詞華しる御之
此つ梅人しる
ちつ思ひ有とほよまりなん
朱雀院乃詞
みこ有ち乃よ津義有御まさ後ハうしそてはて

くし給ひ一夜を給り
みこうまれさせしの男なりけり今は
かめぬるすへこれ細よ又今乃家きこへと也
當色同しく女乃男に云ゆるに津きて大
事なるゝ事をしるしていへる也
いひりてゆけくおもし事なるを
高下同事也
かるはいを
出家する也源氏
れとしにおちぬそ

源氏乃事
無下の宮
曽なり
なし
大納言乃嫡腹
朱雀院別当也　系圖一人奥には前大納
言は年比院乃為に心よしくは
ひきはりてしとあり同人也
為人両様あるにや
右未詳

柏木也　円融院のすゑといふ
何孫宮ゑちとは
　世人をへ捨子に心をとゞめしも
お須賀おとゝを
　柏木の父也
桂中納て
　夕霧乃事
縁よ物とや
　川言
山公ゞらせ給て

院乃山居也
　源氏卅九歳廿二　三乃ころ也
たらひをかやまゐらね
　生老乃次第也
不定なる世れ
　至知也
世にさらん
　源氏廿歳くらゐより出家の心ありし也
故院乃御時よ
　他拠也

后宮の人たてまつりしに
女三宮の母と藤壺と姉妹の
かしをられぬ
朱雀院にはいはなちれ
かつらの西おりてに
栢梁殿　朱雀院にあり
蔵人所はさるとみくらうまひとにゑてまつる
とぞ
同じ女三宮のりやの母円融院の御心
よせの事也　蔵人所も物をうつくし所や

地下の者の作所らしめ一勅　蒼花
人所は今の世には蔵人所とて調進
物なと事共ありてき
指んしやの大臣
大饗の時尊者には其に准して徳爵
甚の三等も有とあり　朱雀院よりくい
つましくり
中宮よりも人々にそくらしれたことに
かのむかしのみくしはきその貝やへはな海
よはなくつてさしふとよの仏よくらしか

くれ
同秋好中宮より朱雀院の女三宮へ
参らせらるゝ昔のくしけの具とも
古物なりやなり　一勘秋好中宮の斎宮ま
立給ひし時用ひしくしみくしなけ
の具なるへし　　裳着にまゐり髪
なともあり　花
ひめ君の御かたに
姫君の御方へまいる院のうへの清消
息なり

さしなからむかしを今に
つたふれは玉のをくしそ
神さひにける
久しきを　早下の心を
あへ物
御ゆかり物へ秋好の事をいへり
御はしさしにみなの物かたとも
中宮より女三宮を祝ことをいへり
同物いひもとの心なりや　かゝみ字清濁有
一勘　合点

むかしの例をたつねはさしもなくて
東宮の昔をもおもしとゞめて 後云を
朱雀院の御縁なりしや
此のうへられの御かとこそみなおりの御
門とひとしくさて御ありのつましと両こその太
上天皇の儀式になすらへられけり始られ
同 六条院の事 院号なくしかも世継て
も太上天皇の儀式なりかくのやうなる
一勘 封戸 年官 年爵なとあり 太上
天皇にかくる一事あけまさると天子まて

御ゆるし御門の服履の後の儀式より
ハ又かくの御への事也 是又勿論なる也
同御封 封戸の戸とハいつもの御事
そや 一勘 戸ハ民の戸たゝ千戸万戸と云ハ
民戸をあたへてなむかしそれを封戸と
をいふ也
例のことしつゝの御車ぬ
同六条院の事 いつもの車なれ御人
青毛 一勘 常の檳榔毛車也
古院のことなれ

源氏語
けふはかゝと
雪山の為れ事かといへり
おのかさし
小や家のまし
御かけにも
けふ毎かう人よりを
源氏詞
せをと為えけさられ
嵯峨天皇御子をと忠仁公に賜ひしに

准して
内親王一人(ひとり)
同じ女宮を親王宣下ありて号せ済
ますや一勘合兵
前の斎院
古歌なりけり
源氏は上にしるす始りし事いふとも
すの森を
朱雀院より御移りし給ふ
かへさしけりさせて

くらぶやまはとをし
源氏にもはしの事
かうゆみ
方ゆかて
しのくらひを
紫上の中
人まうたれかりん
紫上幸ひむくひのまうりをかをり
みをとうりぬ
源氏四十賀之

正月

正月乃実をた多分用子日之次三日あくな
あくに賀事をさ
ゆくりのくいさほひ
よろつれ父も夫をいかかしおくへ
南乃おとゝれ西のくれちいそに
六条院門南の方にれをあ之くちちいて
母屋之
比し紫
唐慈よ大文言新篆縁をとくう（よゑ之）文

龍蟠の地しきといふ所り　鐘の名く
ひ成けし
夏冬のれ添りそく
四季をいふ
かりこゆまは津泉
りん年くいの藪かけの翁しら外鼓と
同く
ゑくしれ多い
造花と臺よりく花をとくれ色之　採以
の花之

未んの君舟は多いめん
日との對面之
おされ於君
玉蟲乃子遊之
かりまけ蟠
異河海鳥　玉りての勝之　三四くくり那家
戸し
人もことしい
字一舟かりし　拾仏
せあておとら知ひ

志田すの公之　源郎にくちおかつし之
さ海るり
遣云之　猿傳す之
小松くし書れよつひよ利つまてや
末孝をき人の齢ひひつまて源氏七年を
はむつしとも
式アロ宮
崇上文之
はむまこれきん白ち
式アロ乃白あ不臣　孫也　御孫ろうしちきん乃

先才之
おとれ
西義　義物　獻物
はかるかと
楽黒ふあ之名之
和こんろ太東おとしにあうしひて
太忠つ結長れ綱孫しし也
まてく衣よ
和那今丹つきすえ
まうらし

和也
めかる類の
上音也　同調子なり
こんハ江つアつ
堂く
一不文
仏徹殿女御なられ桃花の女流之
かつて声ま
呂乃律まけり之
青柳河らひ類

青柳ま鴬をれとる賞あへしとるを
ひ妙之
まとうしことれさ海ま志すし類て緑すと
いとをやさくに海らもしれとり
同云まとうし事乃さ海ふ志すしてある
きやしけるまぬ何　一動けら變ハりとあり
まとうし乃礼義之　きやすさく八堤海
とかく為ともとくれうる公如くしまる
くしるの者早可し為るな義之　ろくあと
きやしさくまとハ一類し類也

けくハ都や囲ふるとて見給ふらしかり
時しる気給て源氏をとこ給ふらし此紀ゟ
世にしるみえて給
玉のはしの男の定給之
ワれまいりしにしの
忘ん為之
御らん海にあそふ所ある流浪の給てわろし
なりけり
同じ臣下の孔ハ妻をと遊ぶ時男ほうし
車様よ保之　河海よ全世祝丸

一　都大略め氏
むこのおほ君
王孫の事しや
みやびをはくし
りろ仏よ
女こ文のまうけれ事ととをは忘と上
しまつや
ゆきて
にくけ京
法仏る子まっし紀とや

くさり
東をさして
かへられつき給まて
堂上詞
思ひわれと打ぬ給ひてれなり
侍るかといよしるゆしなんさせ給ふまゝ
堂上題之
ぬらし
堂上流之備也
かとてしよろの事しけりともみ人へとくかへ

其てたの人来て
かとてといふより源氏の名之
中務中将君
りとふ源氏れ方よまし上使へ下向の時
より覚の方よおり
まふをしたり候人
堂上流
なら我ねこ行る雪と
同之 子城陰処尚残雪 衙鼓声前
未有塵 詩合也 一聯子 謙八小有識

元家に引来て楽天か作を編らるゝ
事也
おほしくらへてれ
女三宮はおかしくらし柳也
御覧かとひきはくろひく
女三宮を柳のふゐ如し
中道抄云
風そてみへゐゑして一
女三宮をれうぬを柳のようなる也　紫上ハ母君也
のふゐ也
恋紙ゐさくり

みをはし　花の宴のひぬ如し
神の句へ
言ハよせて香を引かうし給也
女君に花みを香りのふ香といふくこ
の句ハまほしけも　桜ようはして八文敷、
ありを仏まくうされくやゆみましこれを
ゆあくしたはろくぬほとぬと海のまやらん
をれさうりまゐして　ことや
桜ようして　梅へをさくしれをひの事也
梅くらりま仏をこめうつまやといふ也

花のちり桜ハ梅をとなしてこそや
とも此詞ハ紫上に源氏の給ふ此時紫の
上をとりて御覧しつゝ花の批判し
給ふ也　女三紫上にもおとりてもとくなる気ハ
不用にゆすらうゆるみぬとも流也乃
未開時に梅の咲るなりや
ゐる前にてうつれ花にそへし
ゆるりの摂に於ゐて
女三宮年のほどをいふ紫上の
心と人のうへなしは

源氏
きのふハ宮の御ことにひかれさせ給ひし
いはんなるか
三条の後日にひかえてそてまいる
院の御門におほしく
男としきく
おのつに
大将也
むかしの心
其年の比善悪をとえて按時なしく

とそ
月のくらに
二月中
おさなき人の
かみの詞
女乃御うそく
裳うしぬなとそ
円融院の御母后のおきさいの宮のおはしま
し二条の宮にて
是后宮乃おはせし東三条れて宮といへ

可見一勘合其之悪后乃兄九条殿のむ
すめ也二条之
后乃ミうく
後撰
東乃院よおはしけるの宮の
二条院の東院也
行ろ車九むかしおほして
次ノ八乃れ皆ゐつまつる車なとを
し事也
御けんひを召給よ

みかと申てこ歌也
ゆまはよ
朧月夜のなしもくかろくし地也
こひ歌也
玉りふあそふ
春乃池れ玉藻よあそふ母かゝしこし
母ほとをしまうきり
平仲
うつなきることいへり　同し仲の字
申こりてよむ也　一勘合点

年月数中ふ毎くそく
りおふみちハ
近江よりせくら
あちられちりさきて
散るも
はしやうる
此前よ
朧月夜の君よりそへての歌
お宮
こ弐てんの歌なり

花の宴なけれは
源氏ハ和歌をよみましや
えうあしをかはされぬ物をと
此御の名もなれ
身をもちまんかちを海ての
源の身をもつくつなとよみ給をとつるれ
ふれ和歌明をもつくつき渕なくはれて
御をいとふまし地ハかつましきるかなれ
人はをかましとよう
かつましうりけれ

きつもはかりのかるれ
明石中宮事　十三才也
めはしおさ海
懐妊之
ひめ君にも中れ戸かけてし
紫上液
えけいきたるいめん
家より上れ
紫上も家の所之されとうしろつきるとん
かくしのうかりしをと之

水鳥の河をこへ

あつまるハ池をとしハ見ゆ中の花にとまり御かし又

書きとどいゑんさの計しの出家の命を

うけて書付をとどめけり 源氏の名ハかへる

ぬるを世上のきしふことわるとまり

いとうつし(?)あかりし

朱雀院より入の消息と云

河の母のれあり

見れ松風巻 源氏あての状 同じ名いひくハ

院の御賀にまゐり御堂にて薬師仏

供養し給之此頃大かくもときの(?)は

うひ給へ河内にわかれまくしてのとか

ほんの二条院ハそれまうけせさせ給ふ

二条院にて八内に入の事をさせ給ふ

御賀のと二条院にてのとこるひ給ふや

一禅 合題ハ

得(?)くこゝろにて

御としと

廿三のとゝしのうてとゝき

女三の宮やきし 廿三の宮ハ女三中へあるも

正月廿三日子日なるに御出のあるに

此乃院ハ手くとこ海なく律ともひ給へ所から
丹羽乃まろこうしれ数をおかきて二条院より
うれまうしけハせさせ給
院ともひまふとハハうらく虜之乃事也
内よとハ六条院をうらくつとひ御ふと
いひ又さいなとひ二条院まうらしれ百分
まはと也六條院百世紀よまて二条院
まてりくるく之宴舞楽行り洪職まて
ハ緒事也

院司

六条院乃院目之
らてんれいしあてより
同と侍るを立所ハいゐりの人ル賀ひを
下さる一勘　花色まで先倒ホの世給り
人よよ所ツ義事也　主上こ皇后外た
不審之
ほうしれやうこ
うけよりてかさしをさせ給ふ也
せんもいゐん
庭れうんと

四十八
畢竟よよわり

権中納言
柏木衛門督として入内やとほのしし舞
て いりひや舞の果同経之 同じ中納言て
来乃着もらくかんをましくる頭舞人よ
くりりて舞つ売れ 一勘会点

小乃路百乃別当
小方乃くしひく（ル欠）堂上なるもし 同じ別当
まいいろやうの人なるらや 一勘 別当な

家司乃中将とも 又同じ小路百乃中是とと
号と阿乃 一谷執插家指開り 任
しては正室を小路百とも云姉の代式
あるも
らと勝をとり給て
席田し

故入道宮
廿七まてくれ給

四十寺
杢図 同じ らつ夷都乃畢る寺の立

東宮おはしまや 一部大略強ち寺なへて
こ御覧 定らる事なし
らく宮母みやにて有
源氏の御たいをとさ衣給へるとそや
四十賀といふ事ハ後きしくを
此の人をとらてめさせ給也 仁明天皇の
四十賀て后崩御之
宮の枕にて御座てまゐられ
六条院内ひかしの御の町之 秋好方
かんぬしなれるくなと大きやうにありくて

同云 河海抄ニ大饗とハ中宮乃大饗に
あるへくてさき御記 云く 中宮大饗二
宮大饗ハいつれの時をところに御覧す
御れ 一巻中宮春宮大饗ハ二宮の大
饗といふく 毎年正月二日ニ大門の外の
玄輝門乃東の腋ニて東宮の大饗まゐる
門乃西ニて中宮の饗あり 二季を御御
まひられさるよ
むかし物語ニをえさせ給ふをとゝしに載る
まハ物そへつゝる

問何事をとひ侍てけるにや一助花亭
大概なりきり
中納言にはしはもささせ給てける
源氏詩し給ひしによりて夕霧に作は
もしれきぬくりの華なとなり侍りける
右大将
誰ともなし
うこらの御らよ
むちの里
左右乃おとく

きりふるおほと事
勅之
内乃ゝまいらせ給つ御
主上の宸筆の御繪之上関書并ㇾ
繪ㇾ　私不定
御馬卅十疋左右乃むまは御ら六衛府の官
人ゝみなはいくまちろろ乃ある
ほと
同云　御馬をとひくるに六条院へ内より給へ
てまつりてめりしは中六衛府をとく六になと

もむ丸　答むるまねをゆり
ひろ〳〵倒れ笠ア字文
蛍巻之
のうしてれまろ
御馬とむ〳〵とりて右乃けうさとと二夜
同なるをむ〳〵てるとハ禄を給へるや
右乃はうき方兼れ奥してとハ右乃
禾人の事丸　一勘むへと付とハ門より
ひかれさ付るをうけ乘るまく
ろくとも

大将より始之
同長文一院
一院ハ朱雀院之
ほそく小乃前れ
梅枝夕霧ホさいしひおり　ほ母なれいと
これ以来なしとも
おそくひハよそれ事まさく始
在藤中のまく
おとゝの君れゆし御事を
いまくしきや　葵上れ夕霧生れ始し

附ら也銘しある
はしの山由られ
小丸對之
世人ヨリ 仙人とこいれきこえんや
あしの浦よ
明石乃仙女よあり
くちおしうも
中宮乃上て也銘くねをいへり
かくれ乃方あて
皇上乃方よとりにもとら銘しる

春宮乃せんしなれ乃門跡のもとけ
同云門跡のもとけるか人乃宣旨と号せる
人乃一勤 宣旨ハ宣旨殿とそいひをも
女房乃名にもいひて これハ門跡のもてをも
ゑとうき
七日乃東門よりもちう捧色しかひれすき
朱雀院乃く世銘上て おりしまいれかく
まあや藤人一味より蔵弁宣旨とけく面り
て紛ゆしく影つき海よゆうくまいり候乃石
くれきぬかと

延長元 兼平御門ゝ誕生所父はよ
てらふ尋しあひきこし也 天慶のいはれもそ
き今は門より朱雀院のならひよきを也経
也同云 蔵人のよりせ申 一勅以弁の宣
旨をうけ給つるを蔵人方へ伝ふる事
人の侍也されは侍人に賜録事
今まで見んせぬを
昔乃大臣ゟあるは仏也
みえたりし様て
殿上明石とも

見まゝぬ
明石氏の中宮をと見えまゝぬ之
あのとしけれ
入道のみの行
男にはすみの山をと
花過去因果経 善恵仙人事 善をと仏
のはなをせ様し事そ此須弥乃山王道
よ命よふ右のよろ女にかなり明石上月
日ハ孫の中宮月 左の東日又をとかり 廣き海
よら人ヘ東方の如海をと命りら様ふつまゝ

小舟を般若の舟までは岸にいたる人所
也倍古學斗不可勝計し
小學ことに読
玄賓僧都山に入時の哥にいはく
光出ん
長宮世をもかりそめにつるこそみいにいる闇に
て明におもかくつ為もしなり
月日の意にいり
女乃かたみかりし命日と志るしとも
十吹りまちん

ん海おかりみかも
拾遺三
此みの義にて
仕乃大德詞
多きにて法巖に
深山高しとも　　絶峯也
雲霞に
河海言　不用　只云雲霞也
佛乃むてしの
仏非識常在靈山乃ゐを才子木志るかと

いつとも滅度乃ゆゑ證し事也已上云私
にゐともへより
ゆゑに
すてしの上也
おほろもなしては
われおろけなきあるまなしてハ此仏のやめ給ひ
をはりの事おもし おほろもの命なり
さるありとあることもわれまきもなふ之云
おもしろう覚ゆる也
思ひてまゐり給へり

明石上小兒對面の有様也
くはしくは
明石入道をおもふ心也是詞也
又なく悲しさを記て
心中乃推量云
御こころを
明石上
若君事
父乃為あさくそれ思ひしとも也
ゆうをおとくの

中宮に付奉りて明石上にゆつりける
猶くしおき給ふこと
后にならせ給へとの御願なりしを
さる御事もなかりしなき跡
悲しき中の悦也
めてたしといふ事さへ
古文の心をいふ
宮は東宮
女御なりしハ今は御母にて又后とも申
也 一品宮皇子にてさらせ給て後に

御息所と号せし事にや 一品東宮の
御時さゝれし御子をも御息所と申し 古今
集序一巻二条后を東宮の御息所と
申よし見之 御子の事思ふへし小八りん
尋いるらへ入とて
紫上ありし方へ渡御の事有之
その折くありけるなれは
そうら人のことく往綾かとしいらし縫へせ
尊しとや
守いるらつれ心

紫上事を云
身にはおよひなく
我よ渡りていぬるとぞ
なりこゝろ
源ハひめ宮のかたに
女三宮より渡り給
かとまうり給へるはえしを見くさせて御
木丁をひきよせ身つくろひまうくれ給
なり
ゆふきり

れうし
明石上
思ひ入道なる事つゝ
人の給ん比なるをぶれぬな
なるそく
源氏をとてゆうとの給ぞ
まいハゆかまをひくれて給まうくいひお
とし給ふなりし
源氏明石上出るかつま給ぞ源氏をとい
ひ落しのふとぞくひくれとる源氏

まことし給ひての給ふをいひて
あるをしりて給ひける
源氏らの御もてなしかたしひかたしあふを
あはれなるなかりし
さらぬとしはれはとものはみをこまれ
うしろし
御入道来るを給ひてよろこびんなれ
くれなゐ前之罪を滅さんとなれともなほ
飛花きこえん事をもちくれあるへし
なともや

命ならぬ給ひし
明石上詞
尼公いはく
源氏の金にあひの性をとるなり
ほとけとしらし
これ世にありての
来世をいとふなるや
せんなのおとくは
入道の教ける准拠ハ清慎公なる時
二つ将門征伐当時事　見河海

暮れまとりに
世乃中八の云不安只身乃為之済りる
優なり詞れ多よりて之
此君乃むま絶給し
明石女御事
よこさ海よ
左遷るとのます
これるえくして
源氏乃影をととゑしまふ一部事なり
とや

ゆゑゝれ人公え人
紫上乃公けへといふ一
りとりゆる人き
夫婦兄弟なとへいふよ交
よこゆまれ
他人のあさけをと云
新んるよ
紫上乃公をと云
いかしつの世れ
継子乃事うゑへいよさをとさしゆうね

かくあらんにはかしこき世にもあれとも
しき心なからんしとく身をうつ乃きし
比ゆへうらハそれをとゝめまつへハ逸
ま母をはみえるまじくおりなし
とや

昔乃世乃おろかなる人ハ
又るゝ世の人く乃中の事をいつはる
なれとハ実なる人や実ある人乃中なる
身の上事しるしもうるゝこゝろな哉よし
をとふさし然人なとはまくしとの法るとた

うしひよりてなまて事なりとて
ひとりく
私を人も罪なき事かつ偽まてしくる
しうるをしもとのくまりなるむるとよ
しとや

ゆつよし
故ハ本性中ハ心急てなりさ為くよ用捨
なきとも比後二乃事乃子宮の心なりなよ
つり
うる人为

紫上乃称を得失させ給へるなりと思也
うこひ
明石上事
めでたし前栽に
紫上をめざましくと明石上をと思はぬ
とや
此所にては
明石上のたぐひありとも女御をと合はする紫上
になる也
我れをみさりけりて

明石上早世し給ふと也
おもし成て
見ゆるき人といへり
いはひときて
女三宮を心なしとや
山ぶみを
入道乃隠居を云
かくれそのに
耶修多羅と云 奥入にはなをと云由
一言折 凡倍なりとー 修行物語

のたはしつとの所 堀尾事 後世は不
用と 凡俗あるによりて多くふ知といひて
在あらんと いし 秘伝するやうに称せられさ
秘説りと合ふて有ることし

此宮の事を

女三宮ます
物思ひあるけなるれ給へりとハいひあらし給ふ
ものやうに
いのやうよ合ふしつるあしぬへ此中よ見ゆと
かなる人とも給ふへしされとも〳〵思

まうき事今あり給ふをあはれみ給ふしつまこそあれし
てまへしみ云ふ今也明白也又今のまゝ不
志りのあしぬまゝ人あるとハ給ふしてめふ候ら
をで御納言たる御なしや
忍しおもひけりを

此上れます

我小乃宮よ

雲井雁ます

小侍従とハ
女三宮のめのとこ 柏木のめのとなりし也

りとりほいけりて
源氏の嵩上に公をはきとて給りしとも
みな六条院の道心のあれ
こゆといさせて
同じ小弓のやしがア　一勘雀小弓ゐる
世別角の義なし
うしろれもうに
長散星乃るこ
えんてんのひりしおりそに
寝所の南山きと本にこの南の東まよ

又ひや
きらけれいけるる君をしまりて
明石女御円へ海集り移しけや
又中将弁ー
兄弟三人そ
けるいいとよろしうあれやけ東の北海よ
一勘花多まそろそしー　使きれはそひれ
君てうつし井さ海多の本もえいや
平あはやさ候へとる葉の約ま論まに
のひくやしまいとひしま対に

おとゝも宮を
つゆりのひとつ
毎ゝ鞠にくはゝるさま如くへし
此ゝ乃なす御しれ
表白　裏蘓芳
とおりて
鞠乃譜木成通卿以後は文字多源
氏資雅為有雅ら子也　後鳥羽御代ニ
資雅折花着腰鞠斗在之　禅閤
春乃手向のぬさなる

旅にまかり人にぬさをはのそしハ為相卿
まに手向て無為にかへりつきを旅ぬさの色之
わか袋三月なれは春の手向となり
そしかけし乃二のまれひんくしのそく
那まいは由きれ取をあへけてに鬼以墨
拯阿
同云　前乃詞にさんてんれ東おりてとみて
より家に東れそえとハなめ
一勘消の為と東乃方ゑれるにあへ嘉元
東乃批くとハ鷹中れ東乃杜ちんそうて

といふ心はやいさゝか心のうちの露も挑之精思
業ならし　此段末業得之意可遂
不成候深さし
此哥やう　可深哥遠
おもひとて色の南おりそひ入給ぬかしお
ろうして
さらぬところ
ちらされよし
中庸云
宰相の君ハ

柏木也　右衛門督を兼にし
物のけちハ
柏木をなやみ給
女の宮いらひ
女三宮也
色いらしる事
いとさいなる之貴とふ心之　退て
いかされん花よし
源氏女三の宮の方よと自り給ひぬと
よあり

さくらひとい川よ
鶯ハ桜木母ニ海まてとし
三山本に旅くてさつむかへこ為も
そこ鳥のうつ　一勤　高鳥まうさそこ為
の勲を深山木ま住まうし花をとも三に
もしとも
かんの君ハ
柏木思ふろらの中之
みやつくしを
川辺　鳥ろくりみやかまし　面りけを

みやこの宴の見れりのさしに　又院中の
垣のむつよしむてり
猫いのく
常は如何に小侍従かさすの子うも
情まなしのにちをらん
柏木思をと思ひしと申
南の花とのかしのたれち出に
むろうの川のみ鳥り猫しあて花為ま
西対の母屋如へしとし　东の故出と

所々ハ東對乃母屋に
朱雀院の姫君六条院へ渡り給ひし折なと
まいりし西のたいを放ち出して御丁たてゝそれ
あてられたいまうけられけて女房のつほね
くしし女二宮なと方へおつしまし
ところ出行

紙數百貳拾枚
内閣文庫

国立公文書館
National Archives of Japan